

陸信忠系十王図における士大夫形象 一土地神としての張大帝一

沈 宏琳 (九州大学)

本発表は、南宋(1127~1279)寧波地域の陸信忠工房周辺で制作された十王図(以下、陸信忠系十王図と称す)の内、最後の五道転輪大王幅に必ず描かれる士大夫形象の図像解釈を通して、十王図と寧波の冥界神に数えられる土地神としての張大帝の信仰とが結びついた制作背景を明らかにしようとする試論である。

陸信忠系十王図は、各幅の審判と地獄場面の図像によって、A系統(e.g. 奈良博本)、B系統(e.g. 滋賀永源寺本)とC系統(e.g. 陸仲淵本)に分類できると指摘されている。また各系統間で反復使用される類似モチーフについては、モジュール(組立式部品)の概念が提起されている。五道転輪大王幅では、非人格的な冥王と武将形、士大夫形象とその夫人が、モジュールとして取り上げられる。その内、士大夫形象は、東坡巾などの宋代士大夫の服制に従う同時代の人物像として注目され、十王図の注文主、或いは在地の天台教院延慶寺を中心とする念仏結社の有力信者の姿が投影されたものと解釈されてきた。しかし、士大夫形象とその夫人は、経冊や軸を奉獻し、最後の冥王審判に直接的に関与し、特にC系統では、各系統間でモジュール化されていない俗人男性による経典の寄進を、冥王との間で仲介していることが了解され、この一群が担っている性格と機能は、再検討される必要がある。

本発表では、まず、画中人物の図像解釈を通して、冥王と対峙することの可能な士大夫形象は、冥官や武将形に近い冥界神の性格と機能をもつことを指摘する。次に鎌倉建長寺土地堂の神祇、また因陀羅筆禅機図断簡で智常禅師と対する神祇などの具体例を提示し、この士大夫形象が張大帝であった可能性を述べる。張大帝は、寧波地域における郷村の合併過程で、それまでの村社単位の土地神から、土神という方域神に躍進し、寧波地域における代表的な土地神として信仰されるようになった。最後に、こうした土地神が、写経や造像などを目的とする邑会から発展した念仏結社の活動を通して地域社会において信仰を集め、経冊や軸を十王に進呈する代理人として描かれていることを明らかにする。

本来、土地神は、五代頃に発生していた十王による冥界審判の図像と聯同していたことが確認され、実際、士大夫に近い形象を中国西北で発見された敦煌十王経図巻や華北で流通した水陸儀文の記述にも見出すことができる。一方、十王図が制作された江南における土地神は、地域社会の保護神的な比重が高かったものの、宋代以降には冥界神という華北的要素が移入してくることがすでに指摘されている。土地神が十王図に採用された制作背景を解明することは、宗室の南渡によってもたらされた冥界神としての土地神の信仰を明らかにするだけでなく、後に南宋絵画史の土台となった江南の絵画制作と移植されてきた北地文化との葛藤・融合の一端を描き出すことにもなるだろう。